



TITLE:

詩品から詩話へ

AUTHOR(S):

興膳, 宏

CITATION:

興膳, 宏. 詩品から詩話へ. 中國文學報 1993, 47: 31-63

ISSUE DATE:

1993-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177550>

RIGHT:

詩品から詩話へ

興膳

宏

京都大學

一

「詩話」を定義することは難しい。もし「詩話」の名稱を持つ書という條件を絶対のものとすれば、歐陽修『六一詩話』は疑いもなく詩話の元祖である。しかし、たとえば明の胡震亨『唐音癸籤』（卷三十二集錄三）が、歷代正史の經籍志に依據しつつ、「詩話」に包括される書を時代順に排列するところによれば、唐人の「詩話」が宋以前にすでに存在したことになる。そのリストは李嗣眞『詩品』一卷を筆頭に、以下李嶠『評詩格』一卷、元兢・宋約『詩格』一卷、王維『詩格』一卷、王昌齡『詩格』二卷、同『詩中密旨』一卷、皎然『詩式』五卷、同『詩議』一卷、白居易『金針詩格』三卷、同『文苑詩格』一卷等々と續き、その最後は

詩品から詩話へ（興膳）

孟榮『本事詩』一卷、處常子『續本事詩』二卷、盧瓊『抒情集』二卷を以て終っている。すべて二十八種の「唐人詩話」である。ほぼ同時代の胡應麟『詩數』（外編卷三唐上）も、やはり「唐人詩話」として、李嗣眞『詩品』以下二十種の書名を列舉している。

これら「唐人詩話」中に「格」や「式」の字を書名に有するものが目につくように、その大部分が作詩上の「格式」、つまりこまごまとした技法を説くことに主眼のあったらしいことが想像できる。また事實、王昌齡『詩格』など現存するいくつかの書の佚文からも、それが裏づけられる。『唐音癸籤』の掲げる「詩話」のリストには、さらに『本事詩』のように、詩にまつわる逸話を編んだ小説的な内容の書も含んでいるから、「詩話」の概念の幅はかなり廣いと考えねばなるまい。⁽¹⁾現に宋の代表的な書目の一つ『郡齋讀書志』では、陳師道『後山詩話』、司馬光『續詩話』、歐陽修『歐公詩話』等の詩話六種を、白居易『金針詩格』等の名が見える文説類ではなく、小説類の末尾に録している。「閑談を資ける」意圖の下に編まれた『六一詩話』の内容を連想す

れば、これらの書が小説類中に置かれることもさして不自然とはいえないだろう。

このように、「詩話」の内容の一方の極には、「格」「式」の語で示されるような作詩の技法論があり、他方の極には小説的な瑣事がある。そしてその中間に兩者の性質を包攝しつつ存在するのが、個別の詩評あるいは詩人評であろう。王昌齡『詩格』や皎然『詩議』を始めとする「唐人詩話」を多く収める空海『文鏡秘府論』などは、技法論的な色彩の濃い「詩話」の書ということになるはずである。

ところで、「詩話」の先蹤は、唐代からさらに溯ることができる。章學誠『文史通義』詩話に、「詩話の源は、鍾嶸『詩品』に本づく」という。『唐音癸籤』に録する「詩話」は、あくまで「唐人」という限定つきだから、その中に六朝期の著作が見えないのは當然だが、ただ李嗣真『詩品』の名がそこに存する點には注目の要がある。この書は夙に佚したが、品等法によって詩家を論評した詩論書であったことは明らかで、鍾嶸『詩品』の方法を忠實に繼いだものである。章學誠の指摘するところは、もちろん胡震亨の意

識下にもあつたはずである。こうして「詩話」の範疇は、過去の時代に向かつてさらに廣がってゆく。

乾隆三十五年（一七七〇）の自序を冠する何文煥編の『歷代詩話』は、鍾氏『詩品』を冒頭に配し、次いで皎然『詩式』、司空圖『二十四詩品』という唐人の詩論二篇を連ねて、尤袤『全唐詩話』、歐陽修『六一詩話』以下の宋代詩話に先だてる構成になっている。民國の丁福保の編に係る『歷代詩話續編』が、孟榮『本事詩』、吳兢『樂府古題要解』、張爲『詩人主客圖』、齊己『風巖詩格』の唐人の詩論四篇を以て冒頭に位置づけるのは、いうまでもなく何文煥の方法の延長であり、收録作品の上からはその拾遺である。

これまで概観してきたように、「詩話」という名稱に拘泥せず、六朝・唐の詩評まで含めて「詩話」の系列を廣くとして考える見解が、明清以降行なわれてきた。『詩品』は、いわば原「詩話」なのである。『詩品』を始めとする原「詩話」から、宋代の「詩話」に至る道程は、しかし決して平坦な一本道ではない。その間には、もちろん時代による文學意識の變化という問題があるはずである。『詩品』の持つ

「詩話」としての要因が、次の唐代においていかに受け継がれ、またいかに新しい要因を加えて變貌を遂げながら、宋の「詩話」に繋つてゆくのか、それが本稿の課題である。

二

鍾嶸『詩品』の内容は、漢以來の主要な五言詩の作者に對する個別的な評論であり、その點でまさしく宋以後の詩話の一面を先取りしたようなところがある。また詩評に隨伴する側面として、歐陽修『六一詩話』のごとく、詩人や詩をめぐる瑣事を記録するという性質も、副次的なものではあるが、『詩品』にはすでに備わっている。いまいくつかの例を挙げよう。⁽²⁾ まず上品の謝靈運評では、謝靈運の詩に對する批評を展開したあと、次のような彼の文學とは直接かわりのない出生譚を置いている。

初め錢唐の杜明師、夜 東南に人有り、來りて其の館に入るを夢む。是の夕、即ち靈運は會稽に生まる。其の家、子孫の得難きを以て、靈運を杜の治（原注に、治は晉稚、奉道の家の靖室なり）に送りて之を養わしめ、

詩品から詩話へ（興膳）

十五にして方めて都に還る。故に客兒と名づく。

事實としての信憑性に乏しい志怪的な故事であることはさておき、大詩人謝靈運の出生をめぐる、このような神秘性を漂わせる傳承の存したことを、鍾嶸は記録にとどめたかったのであろう。詩評という本筋から逸脱するような印象を與える同趣の逸話は、中品・下品になるとさらにその數を増してくる。中品謝惠連評には、從兄謝靈運の先の逸話と照應しあうかのような、次の話が見られる。

『謝氏家錄』に云えらく、「康樂（謝靈運）は惠連に對する毎に、輒ち佳語を得。後、永嘉の西堂に在りて、詩を思ふも竟日就らず。寤寐の間、忽ち惠連を見るに、即ち『池塘 春草を生ず』を成す。故に常に云えらく、『此の語は神助有り、吾が語に非ざるなり』と」。

「池塘 春草を生ず」は、それと對を成す「園柳 鳴禽を變ず」とともに、謝靈運「池上の樓に登る」（『文選』卷十二）の名句として、古來評判が高い。名句の由來にまつわる話という意味では、のちの『本事詩』の故事に通ずるような趣がある。同じ中品の話でも、次は「江郎才盡」の

成語のもととなった故事。

初め淹（江淹）宣城郡を罷め、遂に冶亭に宿するに、一美丈夫を夢む。自ら郭璞と稱し、淹に謂いて曰く、「吾に筆有り、卿の處に在ること多年なり。以て還さる可し」と。淹は懷中を探り、五色の筆を得て以て之に授く。爾の後、詩を爲るも、復た語を成さず。故に世に江淹は才盡くと傳う。

下品の區惠恭評に至つては、肝心の詩評そのものが全く見られず、かなりの紙幅を費して、次のようないささかいかかわしい詩作の裏話を掲げている。

惠恭は本胡人にして、顔師伯の幹（幹吏）と爲る。顔詩筆を爲るに、（惠恭）輒ち偷かに之を定む。後、「獨樂の賦」を造るに、語は給主を侵し、斥けらる。大將軍（劉義康）の北第を修くに及び、差はれて作長に充てらる。時に謝惠連は記室參軍を兼ねるに、惠恭時として往き、安陵の嘲調（ホモセクシユアルの營み）を共にして、末に「雙枕の詩」を作りて以て謝に示す。謝曰く、「君は誠に能なるも、恐らくは人未だ重んぜざらん。且く

以て謝法曹（謝惠連）の造と爲す可し」と。大將軍に遺るに、之を見て賞歎し、錦二端を以て謝に賜う。謝は辭して曰く、「此の詩は公の作長の製りし所なり、請う錦を以て之に賜え」と。

これにすぐ續く釋寶月評でも、肝心の詩評はもう一人の詩僧道猷上人と合わせて、「庾・白の二胡は、亦た清句有り」とごくあっさり一言で片づけたあと、釋寶月の盜作をあげいたスキャンダルを記している。

「行路難」は、是れ東陽の柴廓の造る所なり。寶月嘗て其の家に憩うに、會たま廓亡ぶ、因りて竊みて之を有す。廓の子、手本を齎えて都に出で、其の事を訟えんと欲す。乃ち厚く賂して之を止む。

鍾嶸の人間觀察には、まやかしを許さぬ厳しさと、文學という外見上は高雅な營爲の陰にうごめく俗物根性への揶揄が潜んでいる。高い評價を認められる上品の詩人たちはともかく、自己評價と客觀的評價との間に大きな落差のある下品の三流詩人ともなると、鍾嶸の筆鋒はいよいよ辛辣さを増して、作品評に意を用いることの少なくなるほど、

アイロニーを含んだ逸話を記することが多くなる。前掲の故事もそうだが、次の袁淑評のように、短いエピソードだけで詩人としての本質がさらけ出されてしまうような條もある。

蝦の詩は平平なるのみに、多んに自ら謂えらく能なりと。嘗て徐太尉（徐孝嗣）に語りて云えらく、「我が詩には生氣有りて、人の捉着うるを須つ。爾らざれば便ち飛び去らん」と。

時には詩人評から逸脱してしまいそうにさえるこうした敘述は、『文心雕龍』のように整然たる體系的な理論構造を備えた書と比較すれば、恣意的とも見られかねないのだが、それが『詩品』の魅力の一つであることも事實だろう。一見無造作ともいえる感じで、詩評の中に逸話をさしはさむ『詩品』の方法は、どこまで當事者に意識されたかは別として、後世の詩話のありかたに一つの道を拓いたともいえるのではないか。それを必ずしも直接の影響と見なす必要はないが、時代を隔てたエコーがそこに聞きとれるのは確かである。

『詩品』の批評方法を特色づける要因の一つに、折り折り詩句の短い引用を通して、一篇の作品全體あるいは詩人の作風そのものへの評價を、直截的な形で提示する手法がある。引かれる句は、おおむね一篇の眼目ともいふべき「秀句」であり、いわば一篇の詩の中心となる「點」を舉出することによって、作品ないしは作者の全體像をそこに浮き立たせようとする手法といえようか。

「秀句」の語は、中品の謝朓評に、「奇章秀句は、往往にして警適」と用いられており、その概念は、『文心雕龍』隱秀篇にいう「秀なる者は、篇中の獨り抜くる者なり」と多く違わないであろう。隱秀篇にはまた、「文集の勝篇は、十に一にも盈たず、篇章の秀句は、裁かに百に二なる可し。並びに思い合して自ずから逢い、研慮の求むる所に非ざるなり」といい、同篇の贊にも本文の趣旨を要約して、「言の秀づるは、萬慮の一文」といっている。秀句は努力の結果得られるのではなく、思考のはたらきの幸運なめぐり

あわせだというのである。夢の中の啓示によって得られたという謝靈運の「池塘 春草を生ず」(三三ページ参照)などは、まさにそのような意味での「秀句」に他なるまい。秀句は、陸機「文賦」にいう「一篇の警策」の役割を果す存在なのである。『文心雕龍』の著者劉勰とはかなり對照的な文學觀の持主であった鍾嶸が、秀句の重視という點では劉勰とほぼ共通の認識に立っていたらしいことは興味深い。⁽³⁾あるいは一つの時代意識をそこに認めるべきかも知れない。

秀句を用いた詩評の例を、『詩品』の本文に即して見てゆくことにしよう。『詩品』の序三則のその二で、鍾嶸は典故の過度の使用について嚴しい批判を加えているが、そこではすでに詩の摘句が效果的に用いられている。

夫れ屬辭比事は、乃ち通談と爲す。若し乃ち經國の文符は、應に博古に資るべし。撰德駁奏は、宜しく往烈を窮むべし。情性を吟詠するに至っては、亦た何ぞ用事を責ばん。「君を思いて流水の如し」は、既に是れ即目。「高臺 悲風多し」は、亦た惟だ見る所、「清晨 隴首に登る」は、羌故實無し。「明月 積雪を照ら

す」は、詎ぞ經史より出でんや。古今の勝語を觀るに、多くは補假に非ず、皆な直尋に由る。

ここに引かれる四種の秀句のうち、「思君如流水」は徐幹の第一句、「清晨登隴首」は張華「失題詩」の第一句、「明月照積雪」は謝靈運「歲暮」の第三句である。何の典故も用いられていない秀句の例證として、これらの句が引きあいに出版されているわけだ。先に見た謝靈運の「池塘 春草を生ず」もそうだったが、鍾嶸は詩句を引用する場合、おおむね奇數句のみを挙げる。だから讀者は、その句と共に一聯を構成する偶數句、謝靈運なら「園柳 鳴禽を變ず」を、曹植なら「朝日 北林を照らす」を、當然言外に想定しながら讀みとる必要がある。次に詩人評に摘句の挿入されるものを挙げてみる。

1 「去る者日に以て疎し」四十五首は、哀怨多しと雖も、頗る總雜と爲す。……「客遠方從り來る」、「橘柚は華實を垂る」は、亦た驚絶と爲す。(古詩評)

2 新歌の百許りなる篇は、率皆鄙直にして偶語

の如し。惟だ「西北に浮雲有り」十餘首は、殊に美瞻にして翫ぶ可く、始めて其の工を見わす。(魏文帝評)

3 指事殷勤、雅意深篤にして、詩人激刺の旨を得たり。「濟濟たり今日所」に至つては、華美にして諷味す可し。(應璩評)

4 但だ遊仙の作は、辭に慷慨多く、玄宗より乖遠す而も「虎豹の姿を奈何せん」と云い、又た「翼を戢めて榛梗に棲う」と云うは、乃ち是れ坎壈の詠懷にして、列僊の趣に非ざるなり。(郭璞評)

5 文體省靜にして、殆んど長語無し。篤意眞古にして、辭興婉愜なり。其の文を觀る毎に、其の人徳を想う。世其の質直を歎ず。「歡言して春酒を酌む」、「日暮れて天に雲無し」の如きに至つては、風華清靡、豈に直に田家の語と爲すのみならんや。古今隱逸詩人の宗なり。(陶潛評)

ここに擧げる五種の評論のうち、古詩の場合は、いずれも各篇の首句を擧げたもので、いわば詩題の代用の役を果しており、これらの句自體が必ずしも秀句というわけでは

詩品から詩話へ(興膳)

あるまい。魏文帝「西北有浮雲」もそれに準じ、應璩「濟濟今日所」は佚句ながら、やはり首句だったのではないかと想像できる。それに對して、陶潛の「歡言酌春酒」は「讀山海經」其一の第九句、「日暮天無雲」は「擬古」其七の第一句で、前後の文脈からしても、それぞれの詩全體の趣を代表する句として掲げられていることは明らかである。郭璞の「奈何虎豹姿」、「戢翼棲榛梗」の場合は、いずれも連作「遊仙詩」の佚句で、その元來の篇中での位置は確かめようもないが、評者はそれらが世に志を得ぬ憤懣の情を詠ったもので、「列僊の趣」とは異質の句として擧げているのだから、陶潛の場合に近いといえよう。(4)

『詩品』では、ややちがった秀句の擧げかたとして、句をそのまま摘み取るのではなく、その一部を切り取つて全篇の詩題に代用する方法も試みられている。中品の何晏等五人の詩人に對する評論には、次のようにいう。

平叔(何晏)の「鴻鵠」の篇は、風規見わる。子荆(孫楚)は「零雨」の外に、正長(王讚)は「朔風」の後に、札を累ねること有りと雖も、良に亦た聞ゆる無し。

季鷹(張翰)の「黃華」の唱、正叔(潘尼)の「綠蘩」の章は、美を具えずと雖も、文彩は高麗なり。

ここに挙げられる五人の作品の原據を示せば、以下の通りである。(詩題は逯欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』に従う)

何晏「鴻鵠比翼遊、羣飛戲太清」(言志詩「其第一句」)
孫楚「晨風飄歧路、零雨被秋草」(征西官屬送於陟陽侯作「第二句」)

王讚「朔風動秋草、邊馬有歸心」(雜詩「第一句」)

張翰「青條若總翠、黃華如散金」(雜詩「其第一第四句」)

潘尼「青松蔭脩嶺、綠蘩被廣隰」(迎大駕「第四句」)

これに類する例をなお二條挙げ、同様に句の所在を示しておく。

泰機(郭泰機)の「寒女」の製は、孤怨宜しく恨むべし。……世基(謝世基)は「橫海」、顧邁は「鴻飛」あり。

(中品郭泰機等評)

郭泰機「皦皦白素絲、織爲寒女衣。寒女雖妙巧、不得秉杼機」(答傅咸「第二・三句」)

謝世基「偉哉橫海鯨、壯矣垂天翼」(連句詩「第一句」)

顧邁(未詳)

文勝(鄒炎)は詠を「靈芝」に託し、懷寄淺からず。元叔(趙壹)は憤りを「蘭蕙」に散じ、「囊錢」を指斥す

(下品班固等評)

鄒炎「靈芝生河洲、動搖因洪波」(詩二首「其第二句」)

趙壹「被褐懷金玉、蘭蕙化爲芻」(魯生歌「第四句」)。

又「文籍雖滿腹、不如一囊錢」(秦客詩「第六句」)

もっともこの方法には先例があり、沈約「宋書謝靈運傳論」に、聲律のよく整った先人の詩として四篇を挙げ、次のようにいう。

子建(曹植)の「函京」の作、仲宣(王粲)の「霸岸」

の篇、子荆(孫楚)の「零雨」の章、正長(王讚)の「朔

風」の句は、並びに胸情を直舉して、詩史に傍うに非

ざるも、正に音律もて韻を調うるを以て、高を前式に取る。

このうち曹植「函京」は、「贈丁儀王粲」の「從軍度函谷、驅馬過西京」(第一句)から、王粲「霸岸」は、「七哀」其

の「南登霸陵岸、廻首望長安」(第十七句)から抜き出したものである。また孫楚・王讚は、すでに見た中品何晏等評に既出の詩篇だが、「零雨」「朔風」という摘出のしかたまで符を合わせたように一致しているのは興味深い。早い時期の詩は、詩題といっても、後世のように作者自身がどこまで命名したか確定しがたいものが多く、それに四字句・六字句を基調とする詩評中に長い詩題を取りこむのは不都合だから、具體的な作品名に言及する際には、こうした工夫もおのずと必要だったにちがいない。同時代の『文心雕龍』にも似た例が全くないわけではないが、その数はどうい『詩品』に及ばない⁽⁵⁾。それ以前の文學理論にも、同じ趣向の例は見出しがたい。こうして見たしてみると、『詩品』にはかなりはっきりとした秀句の意識が浸透しているように思われる。これは詩論發展の齒車を一つ進めるために、かなり大きな意味を持っていたのである。

四

空海の『文鏡秘府論』南卷に收められる文章のうち、「晚

詩品から詩話へ(興膳)

代銓文者多矣」の句で始まる一篇は、初唐の元兢の撰になる『古今詩人秀句』の序と推定されている。この書そのものは夙に佚して傳わらないが、『新唐書』藝文志集部總集類に、元兢『古今詩人秀句』二卷と著録される。同じく集部文史類に、元思敬『詩人秀句』二卷と録される書は、「思敬」が元兢の字と目されることからしても、恐らく同一のものであろう。『日本國見在書目錄』にも、『古今詩人秀句』二卷元思敬撰として名が見えるのは、その推測をより確實にする。『舊唐書』文苑傳上に、「元思敬なる者は、總章中(六六八―六七〇)に協律郎と爲る。『芳林要覽』を修するに預り、又た『詩人秀句』兩卷を撰して、世に行わる」とあるように、高宗から武則天の時期の人であり、序文中にしばしば則天字が用いられているところからすれば、この書は武后時代に成立した可能性が強い。『秘府論』の編者空海との關係でいえば、彼が弘仁七年(八二六)、嵯峨天皇の命によって、『古今詩人秀句』二卷を屏風に書寫したことが、『勅賜の屏風を書し了って即ち獻ずる表』(『性靈集』卷三・『高野雜筆集』上)に自らの筆で記されている。⁽⁶⁾空海が唐土

から招來した書の一つだったかと思われる。

さて、『古今詩人秀句』なる書は、文字通り古今の詩中から秀句のみを選びすぐったアンソロジーであり、唐代に入って出現した新しいタイプの詞華集である。新唐志の文史類によると、この他になお王起『文場秀句』一卷が存した。黃滔『泉山秀句集』三十卷の名も同時にそこに見えるが、原注に、高祖の武德（六一八—六二六）から昭宗の天祐（九〇四）に至るまでの閩人の詩を編んだものといひ、卷數の多さからすれば、秀句のみを摘んだ選集ではあるまい。元兢は序で、長年にわたって秀句集編纂の構想を抱いてきたが、たまたま大がかりな類書『芳林要覽』の編集にたずさわることになって、多くの文集を閲覽する機會を得、それが直接の機縁となって、懸案であつたこの書の完成に漕ぎつけたといっている。

では、元兢はなぜこのような秀句の選集を編もうとしたのか。以下、序によって彼の意圖を紹介しておこう。元兢は『文選』以來の選集に對する不滿として、第一に作品の選擇が必ずしも妥當でないこと、第二に一篇中から秀句の

みを選び出すという發想のないことを擧げている。⁽⁷⁾彼の秀句集の直接の先蹤となつたのは、太宗の貞觀年間に弘文館學士褚亮が勅命により同僚の諸學士と共に編んだ『古文章巧言語』（假りに書名としておく）一卷である。しかし、この書の選擇にもやはり納得できないところがあつた。たとえば王粲の「瀟（蕭）岸」（「七哀詩」其一、三八ページ參照）、陸機の「尸鄉」（「尸鄉亭詩」、潘岳の「悼亡」、徐幹の「室思」といった詩には、いずれも巧みな句があつて世評も高いのに、收録されていないこと。また謝朓の作品は、鍾嶸も指摘していたように秀句に富むが、「風草 霜を留めず、氷池 明月を共にす」（「冬序羈懷」）のような句を收めながら、より優れた「寒燈 宵夢に耿たり、清鏡 曉髮を悲しむ」（同上）を落すといった疎漏も目につく。元兢はまた謝朓の秀句をめぐって、「行樹 遠陰を澄ましめ、雲霞 異色を成す」（「和宋記室省中」）を推賞する同僚の學士たちに對し、同じ詩中の「落日 飛鳥還り、憂い來たりて極まる可からず」の方が上だと主張して、その理由を辯じたて、一同を得心させた述べている。こうした敘述からすると、元兢の最

も心服する詩人は謝朓であつたらしく、彼の秀句集でもあるいは謝朓の作が中心的な位置を占めていたかと想像できる。彼の考える詩作の要諦は、「情緒を以て先と爲し、直置もて本と爲す」ことである。「直置」とは、細かな技巧を弄せず、まっすぐにことがらを敘述することをいう。

序の結びで元兢は秀句集の選擇範圍について、「時は十代を歴て、人は將に四百ならんとし、古詩自り始めと爲して、上官儀に至りて終りと爲す」と述べている。すなわち漢の古詩に始まつて、唐太宗時代の上官儀に至る歴代の詩人四百人餘りの作品中から選ばれた秀句集だったのである。下限が上官儀であつたことからすれば、生存者の作品を収めないという點で、三世紀末の『文章流別集』に源を發し、『文選』において確立した選集の原則は、ここでも繼承されていたことになる。こうした秀句集という形體のアンソロジーは、事實上唐代で終りを告げたが、恐らくその影響を受けた日本では、大江維時の『千載佳句』（九四七年〜九五七年ごろ成立）や、藤原公任の『和漢朗詠集』を生んで、新しい詩歌形式のために大きな刺激を與えている。⁽⁸⁾

詩品から詩話へ（興膳）

ところで、『文鏡秘府論』に收録される唐代の詩論を眺めていて氣づくのは、摘句を以て詩を論ずることの多さである。それは詩の一篇全體を漠然と論ずるのではなく、詩の生命の集約する秀句に向けて論點を絞る批評の技法ともいいうるだろう。たとえば、傳王昌齡撰『詩格』の佚文と目される一條（南卷）に――

詩に傑起險作し、左穿右穴する有り。

古墓犁かれて田と爲り

松柏摧かれて薪と爲る」

馬毛 縮みて、蝟はりねずみの如く

角弓 張る可からず」

井を北陵の隈に鑿ち

百丈 泉に及ばず」

又た

去る時 三十萬なりしに

獨ひと自り長安に還る

沙場の苦を信ぜずんば

君看よ 刀箭きすの瘢を

此を例と爲すなり。

「傑起險作、左穿右穴」は解りにくい表現だが、たけ高く警拔で、さまざまに心を碎き工夫した表現というようなことらしい。そしてその例として引かれる四種の摘句のうち、「古墓犁爲田」二句は「古詩十九首」第十四首、「馬毛縮如蝟」二句は鮑照「出自薊北門行」、「鑿井北陵隈」二句は同じく鮑照「擬古詩」其四、「去時三十萬」四句は王昌齡「代扶風主人答」から、それぞれ取ったものである。またそれにつづいて――

詩に意闊く心遠く、小を以て大を納るるの體有り。

衣を千仞の岡に振り

足を萬里の流れに濯う

の如し。

というのも、同斷の趣意である。「振衣千仞岡」二句は、左思「詠史」其五からの引用で、前述の四種の摘句も含めて、いずれもよく知られた秀句である。王昌齡『詩格』と並んで南卷に收められる皎然『詩議』にも、やはり引用句を中心に据えた議論が珍しくない。同じ皎然の『詩式』五

卷は、前二者と異なつて現存する書だが、ここでは作詩の要諦を論ずるに當つて、全面的に古今の秀句が中心の位置を占めている。同書序に、「今兩漢從_レり已降、我が唐に至るまで、名篇麗句、凡そ若干人」とあるが、創作の楷模として引用される詩は、大部分が二句ないし四句の「麗句」であり、「名篇」すべてが引かれることはほとんどないといつてよい。いわば頂點に狙いを定めて、作詩の極意を伝えようとするものであらう。秀句を批評の中に組みこみながら詩論を展開することは、唐代の理論家たちの共通の技法といえるまでに定着していたようである。

五

いわゆる「唐人選唐詩」の代表格として知られる殷璠撰『河嶽英靈集』が『詩品』に學ぶところの大きかったことは、『四庫全書總目提要』によつて指摘されて以來、廣く知られるところとなっている。但し、二十四人の收載詩人について、「姓名の下に、各おの品題を著け、鍾嶸詩品の體に仿う」とあるのはよいとしても、『河嶽英靈集』（以下

『英靈集』と略稱する)の上中下三卷の體裁が「鍾嶸三品の意を寓」するというのは、すでに諸家によって指摘されているように、明らかな事實誤認である。⁹⁾現行本は確かに三卷だが、新唐志・『郡齋讀書志』・『直齋書錄解題』・『宋史』藝文志等が均しく二卷の書とし、また現行本及び『文苑英華』卷七百十二・『文鏡秘府論』南卷所收の殷璠序でも、「上下卷と爲す」といつているように、上下二卷が本來の體裁だったにちがいない。それに『詩品』とは異なつて、『英靈集』が收録した詩人たちを上中下三品に分かつて評價する意圖は、本文に即してみても、全く感じとることができない。『英靈集』が『詩品』の影響を蒙っているのは確かに事實だが、それは三品の品第法といった體裁の面ではなく、批評方法そのものに深く食いこんだ問題として検討される必要がある。

『英靈集』はもっぱら盛唐の詩人の作品を收録するが、對象となつた時期に關しては序に明記されはするものの、テキストによつて多少の異同がある。明刻本(四部叢刊本)及び『祕府論』南卷所收の序には、選詩の範圍を「甲寅に

詩品から詩話へ(興膳)

起りて、癸巳に終る」と記す。「甲寅」は開元二年(七二四)に、「癸巳」は天寶十二(七五三)年に相當する。ところが、『文苑英華』及び『全唐文』卷四百三十六所收の序では、その個所が「起甲寅、終乙酉」となっており、それに従えば、下限は天寶四年(七四五)になる。また『國秀集』に附された宋の曾彥和跋によれば、『英靈集』は天寶十一載(七五二)に作られたことになっている。

王運熙氏は、收録作品の制作年代を細かに検討した結果、天寶四年以降に作られた作品も含まれているところから、天寶四年下限説を退け、天寶十二年下限説を取っている(『河嶽英靈集』的編集年代和選詩標準、『中國古代文論管窺』所收、一九八七年)。王氏によれば、開元年間及び天寶前期に作られた詩が多數を占める。また杜甫の詩が全く採られていないという後世の眼からすればいささか奇妙な事實について、王氏は杜甫には天寶中期以前の作品が少なく、當時彼の作品がまださほど流布していなかつたことに原因があると見ている。傾聴すべき考えであらう。

さて、『英靈集』は各詩人について、まず簡約な詩評を

設け、次いで五六首から十數首に及ぶ作品を配置する。⁴⁰つまり詩評と作品を一つのセットとして組み合わせているのである。そしてその詩評には、『詩品』の影が色濃く窺えることを誰も否定できないだろう。短い例を三つ挙げよう。

祖詠

詠詩剪刻省靜、用意尤苦。氣雖不高、調頗凌俗。至如「霽日園林好、清明烟火新」、亦可稱爲才子也。

詠の詩は剪刻省靜、思いを用うること尤も苦しむ。氣は高からずと雖も、調は頗る俗を凌ぐ。「霽日園林好し、清明烟火新たなり」の如きに至りては、亦た才子^た爲りと稱す可きなり。

盧象

象雅而平、素有大體、得國士之風。曩在校書、名充祕閣。其「靈越山最秀、新安江甚清」、盡東南之數郡。象は雅にして平、素^{もと}より大體有りて、國士の風を得たり。曩^{さき}に校書に在りて、名は祕閣に充^みつ。其の「靈越山最も秀で、新安江甚だ清し」は、東南の數郡を盡す。

李嶷

嶷詩鮮淨有規矩。其「少年行」三首、詞雖不多、翩然佚氣在目也。

嶷の詩は鮮淨にして規矩有り。其の「少年行」三首は、詞多からずと雖も、翩然として佚氣の目に在るなり。

『詩品』の詩評の特徴として、秀句を效果的に生かすことを指摘したが、『英靈集』はその手法を基本的に繼承しつつ、いっそう頻度高く秀句を引いて、それを批評の中に融合させている。祖詠評の「至如霽日園林好、清明烟火新」と同じ語法が、『詩品』陶潛評に、「至如歡言酌春酒、日暮天無雲」とすでに見えていることに注意されたい。(三七ページ参照)

『詩品』の詩評の第二の特徴は、ある詩人を評するに當って、まずその詩風の本質を簡約な評語で概括的に提示することである。たとえば曹植評の「骨氣奇高、詞彩華茂。情兼怨雅、體被文質」、劉楨評の「仗氣愛奇、動多振絕。眞骨凌霜、高風跨俗」、陸機評の「才高辭瞻、舉體華美」、張協評の「文體華淨、少病累」、陶潛評の「文體省靜、殆無長語。篤意眞古、辭興婉懷」など、いずれもそのいみじ

き例である。『英靈集』の詩評は、その點でも『詩品』の忠實な祖述者といえる。先に擧げた祖詠・盧象・李嶷の三例は、ともにその冒頭で同趣の評語に出會うはずである。その他にも、王維評の「詞秀調雅、意新理愜」、劉昫虛評の「情幽興遠、思苦語奇」、王季友評の「愛奇務險、遠出常情之外」、陶翰評の「既多興象、復備風骨」、李頎評の「發調既清、修辭亦綉」、岑參評の「語奇體峻、意亦造奇」など、ほとんどの詩評の冒頭でこの方法が踏襲されている。

そして第三には、『詩品』に特有の批評用語が、時としてほとんど生地そのままで使用されていることに着目すべきであろう。既出の祖詠評の「省靜」は、陶潛評の「文體省靜」を用いているが、この「省靜」の語は、『詩品』以前にその例を見出し難いものである。盧象評の「得國士之風」は、任昉評の「善銓事理、拓體淵雅、得國士之風」をそのまま模しているし、李嶷評の「有規矩」は、陸機評の「尚規矩、不貴綺錯」に、また「翩翾然」は、潘岳評の「翩翾然如翔禽之有羽毛」に仿ったものであろう。他にも序の「武德初、微波尚在」は、『詩品』序の「爰及江左、微波尚傳」を、同

詩品から詩話へ（興膳）

じく「豈得逢詩軋纂、往往盈帙」は、やはり『詩品』序の「至於謝客集詩、逢詩軋取、張隲文士、逢文郎書」を、王維評の「一句一字、皆出常境」は、顏延之評の「一字一句、皆致意焉」を模したことが容易に看取できるはずである。

以上のような個別の詩評のほかに、全書を通じて『詩品』との關連を検討すべき點がなおいくつかある。その一は、序の配置に關する問題。『英靈集』には、序のほかにいま一つ「集論」と名づけられる文章があり、明刻本では序につづけて卷頭に置かれている。また『祕府論』でも、序のすぐ後に併置される。「集論」とは、「英靈集の論」の意ではないかと思われ、その内容は詩の聲律を論じたもので、いわば第二の序である。そこで想起されるのは『詩品』に三篇の序の存することで、『四庫全書總目提要』は、「分ちて上中下三品と爲し、每品の首に、各おの冠するに序を以てす」といっており、『詩品』諸本の多くが、上中下三卷の卷頭に序を配している。『詩品』序の本來の位置がどうだったかについては論争のあるところで、今は立ち入らないが、假りに三篇の序が三卷という全書の體裁に合わせて

配置されたものだったとすれば、『英靈集』の場合も、「集論」が下巻の最初に設けられていたことも十分ありうる。¹²⁾

『詩品』の第三の序は聲律の問題をあつかっているが、その点でも「集論」と符合するのは注意しておく必要がある。

その二は、理論の核ともいふべきキイタームの使用である。『英靈集』の序に、「蕭氏（齊梁）自り以還、尤も矯飾を増し、武徳の初め、微波尙お在り。貞觀の末、標格漸く高く、景雲中、頗る遠詞を通ず。開元十五年の後、聲律風骨始めて備わる」という。六朝期の過度に技巧を弄する華美な詩風が、唐初以來少しずつ改革され、開元半ばに至って始めて聲律と風骨の備わった現代の詩風が確立したとするのである。すなわち殷璠は、風骨（力強さ・たくましさ）と聲律（音聲の調和）という二つの要素が整合的に統一された詩を以て、最高の詩境と見なしている。この内容と形式の相即的な充實ということとは、「集論」の末尾でも、選詩の方針と關連して、「璠の今集むる所は、頗る諸家に異なり、既に新聲に閑いて、復た古體を曉る。文質半ば取り、風騷兩つながら挾む。氣骨を言えは建安を傳と爲し、宮商を

論ずれば則ち太康も逮ばず」と述べられている。「氣骨」は「風骨」の、「宮商」は「聲律」の類義語と考えてよい。

聲律の尊重は、六朝の齊梁以後の詩作において、特に著しい現象であるが、『詩品』の著者鍾嶸はその風潮に對して、あからさまな反感を隠さなかった。彼が古今最高の詩人として稱贊を惜しまない曹植は、「骨氣は奇高にして、詞彩は華茂。情は雅怨を兼ね、體は文質を被る」と評されるように、たくましい詩精神（骨氣）と華麗な表現（詞彩）がバランスよく統一されていたところに最大の長所が存したのだが、その「詞彩」を構成する要素として聲律を認めることは、鍾嶸の考えにはまるでなかった。「氣」「風」「骨」といった語によって表わされる、生命力の横溢する詩風を讃える點では、彼も殷璠と同じ主張を示しているのだが、聲律に關しては、むしろそうした詩精神の自由な流露を妨げるマイナスの要因と見なされているのである。

殷璠における「風骨」と「聲律」の重視はすでに見た通りだが、この兩者は本と末の關係によって統合されていることを忘れてはならない。實はその點にこそ、『詩品』の

影響を蒙りながら、『詩品』の理論を越えた『英靈集』の獨自の價值があるのだ。『英靈集』序に次のような一節がある。

曹・劉の詩の如きに至りては、直語多く、切對なし。或いは五字並びに側（仄）、或いは十字俱に平なれども、逸價終に存す。然るに挈瓶膚受の流は、古人の宮商を辨ぜず、詞句の質素なるを責めて、相い師範するを恥ず。是に於て異端を攻め、妄りに穿鑿し、理は則ち足らざるに、言は常に餘り有り、都て興象無くして、但だ輕艶を貴ぶ。篋笥に滿つと雖も、將た何ぞ之を用いん。

聲律を風骨と共に詩作の缺かせぬ要素と見なすとはいえず、それは決して聲律の效用を無制限に承認しているわけではない。古人の詩に對句や平仄が不備だからといって、その眞價を認識できない者は、價值觀の本末を顛倒しているのである。いいかえれば、末の位置に在つてこそ意味を持つはずの聲律を、すべてに優先する條件として考えるために、詩の内容をつまらなくしているというわけだ。「曹・劉を笑いて古拙と爲し、鮑照を羲皇上の人、謝朓を古今獨歩と

詩品から詩話へ（興膳）

謂う」ような「輕薄の徒」（『詩品』序）を唾棄する鍾嶸と、聲律に關する認識のちがいはありながら、考えかたの基調に響きあうものが感じられよう。『英靈集』の王昌齡評に、「元嘉以還の四百年内、曹・劉・陸・謝の風骨は頓に盡く」とあるが、言外に聲律の過度の重視が、この時期の詩をつまらなくしたという認識を見てとるべきである。因みに曹植・劉楨・陸機・謝靈運は、『詩品』序に「昔、曹・劉は殆んど文章の聖、陸・謝は體貳の才」とあるように、鍾嶸の推賞する四人の大詩人である。第二の序ともいふべき「集論」でも、聲律の重要性を説きつつ、機械的な聲律偏重を固く戒めている。

詩作の要諦にあつて本の位置を占める「風骨」及びそれと同義ないしは近親的な評語は、個別の詩人評でも、以下に見るように頻出してゐる。

頃東南に高唱する者數人あり、然れども聲律の宛態なるは、其の右に出づる無し。唯だ氣骨は諸公に逮ばず。（劉勰虛評）

既に興象多く、復た風骨を備う。（陶翰評）

然れども適の詩には胷臆の語多く、兼ねて氣骨有り、故に朝野通じて其の文を賞す。(高適評)

顥は年少に詩を爲るや、名は輕薄に陷る。晚節忽ち常體を變じて、風骨凜然たり。(崔顥評)

據は人と爲り骨硬にして、氣魄有り、其の文も亦た爾り。(薛據評)

其の「少年行」三首は、詞多からずと雖も、翩翩然として佚氣目に在るなり。(李疑)

「風骨」の尊重は、陳子昂「修竹篇序」に、「漢魏の風骨は、晉宋傳うる莫し」とあるように、時代の文學思潮の趨勢を反映するものでもあるが、一方また「氣」「風」「骨」などのタームが前述のごとく『詩品』の詩論の眼目をなすものであることにも留意しなければならない。鍾嶸が古今最高の詩人と目する曹植が「骨氣は奇高」と評され、彼に次ぐ劉楨が「氣に仗りて奇を愛し、動に振絶多し。眞骨は霜を凌ぎ、高風は俗に跨る」と評されることが、何よりも雄辯にその事實を物語っている。しかも、さらに興味深いのは、強い個性や獨創性を意味する「奇」の語が、そこに

關連して現われることである。『英靈集』でも、「奇」の語が積極的なプラス評價を示すタームとして一貫して用いられていることは、やはり注目に値する。『蜀道難』等の篇の如きに至りては、奇の又た奇と謂う可し(李白評)、「思いは苦にして語は奇」(劉昫虛評)、「奇を愛して險に務め、遠く常情の外に出づ」(王季友評)、「燕歌行」等の篇の如きに至りては、甚だ奇句有り(高適評)、「語は奇にして體は峻、意も亦た奇に造る」(岑參評)。

このように種々の層にわたって『英靈集』の詩論を検討してみると、そこにしばしば『詩品』的なものが色濃く影を落していることに氣づかざるを得ない。殷璠は從來考えられてきた以上に、『詩品』から詩論のありかたを學びとろうと努めていたのではなかったか。そのことは、殷璠のもう一つの編著『丹陽集』の検討を通じて、さらに明らかにされるであろう。

六

『河嶽英靈集』の編者殷璠に、『丹陽集』一卷(「陽」は一

に「楊」に作る）というもう一つの詩選があったことは、その書が新唐志（集部文史類）・『崇文總目』（總集類）等の書目に著録されることによって知られる。『日本國見在書目錄』にも名が見えるから、わが國に早くから渡來していたことは確實である。その内容については、新唐志集部別集類の『包融詩』一卷の原注に、次のような記録がある。

（包融）潤州延陵人。歷大理司直。……融與儲光義皆

延陵人。曲阿有餘杭尉丁仙芝、緱氏主簿蔡隱丘、監察御史蔡希周、渭南尉蔡希寂、處士張彥雄・張潮、校書郎張暈、吏部常選周瑒、長洲尉談戴。句容有忠王府倉參軍殷遙、硤石主簿樊光、橫陽主簿沈如筠。江寧有右拾遺孫處玄、處士徐延壽。丹徒有江都主簿馬挺、武進尉申堂構。十八人皆有詩名、殷、遙、堂、次其詩、爲丹、楊、集者。

この文とほとんど同じものが、『唐詩紀事』卷十五張暈の項に收められている。⁶⁶⁾これらによって、『丹陽集』が編者殷璠と同じ丹陽出身者十八人の詩を集めた選集であったことは明らかである。『唐音癸籤』卷二十八談叢に、『丹陽集』

所載の十八家を官名と共に列敘したあと、「殷氏の其の履歷を敘するに、但だ一二のみ稍や顯なり。白餘は布衣冗秩、篇中に旁午^みつ。此れ豈に此の方當時遂に貴く且つ文ある者無かりしか」というのは、皮肉な見かただが、確かにそのような一面がないではない。

『丹陽集』は佚してすでに久しく、その全貌を窺うことはもはや不可能だが、幸いにして宋・陳應行撰『吟窓雜錄』にその佚文が拾われており、それによって大體の形を想像することができ。『吟窓雜錄』五十卷は、全書の内容からするとかなり雜駁なできばえで、引用は常に不完全な斷章であり、誤字も少なくないが、往々にして他書にない貴重な佚文を收めており、利用のしかた次第では極めて有用な資料となりうる。『丹陽集』の場合もその一例である。まず『丹陽集』序の佚文は、卷四十一雜序の卷頭に見出される。⁶⁷⁾（『吟窓雜錄』の底本には内閣文庫藏明嘉靖四十年刊本を用い、明らかな誤字は、「」内の字によって正すべきことを記す。また異體字や俗字は正字に改める）

李都尉沒後九百餘載、其間詞人、不可勝數。建安未

〔末〕、氣骨彌高、大〔太〕康中、體調尤峻、元嘉筋骨仍在、永明規矩已失、梁陳周隋、厥道全喪。蓋時遷推變、俗異風革、信乎大〔人〕文化成天下。

李都尉沒して後九百餘載、其の間の詞人は、勝^あげて數う可からず。建安末、氣骨彌いよ高く、太康中、體調尤も峻^{けつ}し、元嘉は筋骨仍^なお在り、永明は規矩已に失われ、梁・陳・周・隋は、厥^その道全く喪ぶ。蓋し時遷りて推變し、俗異なり風革まる、信^{まこと}なるかな人文の天下を化成すること。

わずか六十八字の文だが、これに續いて收録される『河嶽英靈集』の序がそうであるように、冒頭の部分を摘録したものと^お思われる。その趣旨は魏晉以降の詩の頽廢を嘆じたもので、陳子昂「修竹篇序」等と調子を同じくする。この後、恐らく唐詩の興起を贊える内容がくりひろげられていたのであろう。末尾の「人文化成天下」は、もちろん『易』賁卦象辭の、「觀天文以察時變、觀人文以化成天下」を承けたものである。

『丹陽集』本文の佚文は、『吟窓雜錄』卷二十四から二十

六にかけての「歷代吟譜」に收められる。次にその全てを、原文の順序通りに番號を附して引くことにする。

1 包融（卷二十四）

與儲光義〔義〕等十八人皆有詩名。詩曰、「春夢隨我心、搖揚逐君去」。又詩、「荒臺森荆杞、朦朧無上語」。殷璠稱之曰、「融詩青〔情〕幽語奇、頗多剪刻」。

2 孫處玄（卷二十五）

善屬文。有詩曰、「殘花與露落、墜葉隨風翻」。又詩、「日側南澗幽、風凝北林暮」。又詩、「漢家輕壯士、無狀殺彭王。一遇風塵起、令誰守四方」。

3 沈如筠（同上）

殷璠曰、「如筠早歲馳聲、白首一尉。如筠詩曰、「綠羅無冬春、彩雲竟朝夕」。又詩、「嘶酸寒雁斷、淅瀝秋樹空」。又詩、「漁陽燕舊都、美女花不如」。

4 丁仙芝（卷二十六）

殷璠曰、「仙芝詩、婉麗清新、迴出凡俗。恨其文多質少」。仙芝詩曰、「窮巷常閉戶、秋成〔城〕聞擣衣」。又詩、「樹迴草秋色、川長遲落暉」。又詩、「庭閑花自

落、門閉水空流」。又詩、「山空響不散、溪靜曲宜長」。

5 殷瑤（同上）

殷瑤曰、「瑤詩閑雅、善用聲」。瑤詩曰、「野化成子落、江燕引雛飛」。又詩曰、「遊魚逐水上、宿鳥向風棲」。

6 張彥雄（同上）

殷瑤曰、「彥雄詩、但貴『貴』消『瀟』洒、不尙綺密。至如『雲壑疑〔凝〕寒陰、岩泉激幽響』、亦非凡俗之所能至也」。

7 儲光羲（同上）

殷瑤曰、「光羲詩、宏瞻縱逸、務在直置」。光羲詩曰、「日暮閑園裏、團團蔭榆柳」。又詩、「當暑日方晝、高天無片雲」。又詩、「桑間禾黍氣、柳下牛羊羣」。又詩、「河洲多青草、朝暮滋客愁」。又詩、「山開紅蒙色、天轉招搖星」。又詩、「山門入松柏、無路極虛空」。

8 蔡隱丘（同上）

殷瑤曰、「隱丘詩、體調高^マ高險、往往驚奇、雖乏綿密、殊多骨氣」。蔡詩曰、「整巾千嶂聳、曳履百泉鳴」。又詩、「山上天將近、人間路漸遙」。又詩、「草徑不聞

金馬詔、松門唯見石人看」。

9 張潮（同上）

殷瑤曰、「潮詩、委曲怨切、頗多悲涼」。潮詩曰、「孟夏麥始秀、江上多南風」。又詩、「日暮情更來、空望去時水」。

10 蔡希周（同上）

殷瑤曰、「希周詞彩明媚、殊得風規」。蔡詩曰、「綵殿氛氲擁香溜、紗窓宛轉閉春風」。

11 張暈（同上）

殷瑤曰、「暈詩、巧用文字、務在規矩」。暈詩曰、「茫茫煙水上、日暮陰雲飛。孤坐正愁緒、湖南誰擣衣」。

12 周瑀（同上）

殷瑤曰、「瑀詩、窈窕鮮潔、務爲奇巧」。瑀詩曰、「寒深色晚橘、風緊落垂楊」。又詩、「孤山日暮青」、亦爲清唱。⁴⁹

13 蔡希寂（同上）

殷瑤曰、「希寂詞句清迴、情理綿密」。希寂詩曰、「河水流城下、山雲起路傍」。又詩、「象筵列虛白、幽偈清

心胸」。

14 談戴（同上）

殷璠曰、「戴詩、經典古雅」。戴詩曰、「青青江潭樹、日夕增所思」。又詩、「雲蔽望鄉處、雨愁爲客心」。

15 余延壽（同上）

殷璠曰、「延壽詩、婉變艷美」。余詩、「餘花苑春盡、微月起愁陰」。又詩、「莫吹胡塞曲、吹殺離頭人」。

16 申堂構（同上）

殷璠曰、「〔堂〕構善敘事詠物、長於情理」。詩曰、「霜添栢樹冷、氣拂桂林寒」。

17 樊光（同上）

殷璠曰、「光詩理周旋、詞局妥帖」。光詩曰、「巧裁蟬賓畏風吹、盡作蛾眉恐人妬」。

『丹陽集』所收の詩人十八家のうち、馬挺を除く十七家に關する詩評がここにある。また6張彦雄の條がやや趣を異にする以外は、「殷璠曰」に始まる各家の詩風に對する概括的な評論と、おおむね二句を一組とする摘句から成つてゐる。この摘句が『英靈集』の場合と同じく詩評中の引用

句なのか、それともこの選集中の作品からの『吟窓雜錄』編者による摘錄なのかは、一見しただけでは判別できない。では、その區別は結局つけられないのかというと、そうではない。『吟窓雜錄』卷二十七には、常建に關する文一條があつて、「殷璠曰、高才而無貴仕」という評論と、常建の摘句三種が一組となつて收められており、次いで劉昫虚の一條にも、「殷璠曰、昫虚詩、情幽興遠」という評論と、その摘句七種が引かれている。この二人は『英靈集』に作品を選ばれた人物であり、同書の詩評を一覽すれば、これらの詩句が殷璠の評論中に引かれる摘句を、順序も全くそのまま拾ひ上げたものであることが確認できる。²⁰ここから類推すれば、『丹陽集』の摘句も、やはり詩評中のものと想定してほぼ誤りないのではないか。

以上の推論から、さらに『丹陽集』の形體について次のようなことが考えられる。第一に、『丹陽集』も『英靈集』と同様に、詩評と作品の組み合わせによつて構成されていたこと。第二に、詩評も『英靈集』の場合と同じく、詩風の概括的な評論に、秀句の引用を適宜點綴しつつ組み立て

られていたこと。すなわち『丹陽集』は、『英靈集』と基本的にほとんど同じ形體の選集であったということになる。

上掲の佚文中に見える殷璠の評論を見渡して氣づくのは、ここでもやはり『詩品』風の評語やいいまわしが少なくないことである。たとえば4丁仙芝評の「迴出凡俗」は、『詩品』中品袁宏評の「彦伯詠史、雖文體未適、而鮮明緊健、去凡俗遠矣」を思わせるし、「恨其文多質少」は、上品劉楨評の「但氣過其文、雕潤恨少」及び同王粲評の「文秀而質羸」と共通するところがある。また6張彥雄評の「至如——」という秀句を詩評中に融合させる句法が『詩品』に始まることは、すでに前章で觸れた(四四ページ参照)。8蔡隱丘評の「殊多骨氣」と、10蔡希周評の「詞彩明媚」は、上品曹植評の「骨氣奇高、詞彩華茂」及び張協評の「詞彩葱青」から評語を得ているし、11張暉評の「巧用文字、務在規矩」は、中品張華評に「巧用文字、務爲妍冶」と極めて類似した表現が用いられている。また「規矩」は、前章で見たように、陸機評中の語彙である(四五ページ参照)。12周瑒評の「務爲奇巧」も、前掲の張華評の語法を模した

詩品から詩話へ(興膳)

もの。主要な類似點だけを拾っても、こうしたことが目を引く。

こうして検討を重ねてくると、殷璠の『詩品』への傾倒ぶりが並み一通りのものでなかったことがよく分かる。同時に、唐代の詩論における『詩品』の批評方法の重みを、改めてそこに認識すべきであろう。

七

『詩品』の影響を強く受けた詞華集としては、『河嶽英靈集』の系列に屬する高仲武編『中興間氣集』二卷の名も逸することができない。この書は、肅宗の至徳初(七五六年)から代宗の大暦末(七七九年)に至る時期の詩人二十六人の詩百四十首(一に百三十二首)を収めた詩選である。『河嶽英靈集』の對象とするのが盛唐期の詩人たちであるのに對して、『中興間氣集』(以下、『間氣集』と略稱する)の場合は、盛唐と中唐をつなぐ大暦の詩人たちが中心を成している。全書の構成については、『四唐全書總目提要』に、「姓氏の下に各おの品題有りて、其の警句を拈すること、『河嶽英

『靈集』の例の如し」と指摘するように、詩評と作品の組み合わせを基本とすること、『英靈集』の體裁と異なるところがない。「河嶽英靈」と「中興間氣」の平仄が對應するもの、或いは偶然の現象ではないのかも知れない。詩人評の冒頭で、まず概括的に詩風を論ずる方法も、『英靈集』との連續性を印象づける。

高仲武は序において選詩の基準に言及し、「但だ體狀を使得風雅ならしめ、理致をして清新ならしめ、觀る者をして心を易えしめ、聽く者をして耳を疎^{そだ}たしむれば、則ち朝野通じて取り、格律兼ねて收む」と述べている。⁽²⁾この中で、高仲武の文學觀を窺うために特に重要なのは、「風雅」「清新」の二語であろう。前者は『詩經』の詩以來の傳統に連なる正統的な詩のありかたを示し、後者は當世風の新しい感覺に溢れた詩趣を意味するものと思われる。この「風雅」と「清新」は、個別の詩人評を通じて見ても、詩人の評價を定める際の二本の柱を形成していたように見受けられる。

『間氣集』も詩人の品第評價を目的とする書ではないから、詩人の排列がその評價と直接の關わりを持つわけでは

ないが、ただ上下二卷の冒頭にそれぞれ錢起と郎士元を配しているのは、のちに見るように、彼らに最も高い地位を認める「壓卷」の意味がありそうだ。⁽²⁾錢起の詩評には、そうした高い評價がよく反映しているが、そこには「風雅」と「清新」の兩面から彼の詩に寄せられた贊辭を窺うことができる。「員外の詩は、體格新奇、理致清瞻」というのは、明らかに「清新」の趣を指したものだ。また、「鳥道疎雨挂^かり、人家夕陽殘^くる」、「牛羊山を上りて小さく、烟火林を隔てて疎なり」、「長樂の鐘聲花外に盡き、龍池の柳色雨中に深し」の三聯を引いて、「皆な意表に特出し、雅を古今に標^{しめ}す」と評し、次いで「窮達明主を戀い、耕桑亦た近郊」を引いて、「禮義克^{よく}全うし、忠孝兼ねて著わる」と稱えるのは、「風雅」の趣に屬する。錢起の詩に對して高い評價が與えられるのは、この「風雅」と「清新」の二つの要素が、バランスよく體現されていることに大きな原因があるのではないか。『詩品』が創始した體系的な批評基準の設定が、『英靈集』に續いて『間氣集』でも貫かれているとしてよいであろう。以下に、個別の詩人評から、

「風雅」「清新」の趣に連なる批評を掲出してみよう。まず「風雅」から。

「自ずから當に舟楫の路なるべく、應に往來の人を濟すべし」は、諷興の要を得たり。（張衆甫評）

「氣を受くること何ぞ曾て異ならん、花を受くること獨自り遅し」の如きは、所謂「哀しみて傷まず」、國風の深き者なり。（朱灣評）

兩君（錢起と郎士元）の體調は、大抵同じからんと欲するも、就中郎公は稍や更に閑雅にして、康樂（謝靈運）に近し。（郎士元評）

崔拾遺は、文彩炳然として、意思方雅なり。（崔峒評）

其の「罪を得て風霜に苦しみ、生を全うして天地仁なり」は、傷みて怨まずと謂う可く、以て風雅を發揮するに足る。（劉長卿評）

次に「清新」の趣に屬する批評を擧げよう。

李詩は輕靡にして、華は實よりも勝る。此れ所謂る才力足らず、務めて清逸を爲すなり。（李季仲評）

冉詩は文字に巧みにして、發調は新奇、遠く情外に

詩品から詩話へ（興膳）

出づ。（皇甫冉評）

詩體は清迥にして、道者の風有り。（張繼評）

詩體は新奇ならずと雖も、甚だ練節を能くす。（劉

長卿評）

體制は清潔にして、華は文に勝らず。（皇甫曾評）

また于良史評の、「侍御の詩は清雅にして、形似に工みなり」は、「風雅」「清新」双方の趣を兼ねることをいっているのかも知れない。

『詩品』の推す最高の詩人は曹植、それに次ぐのは劉楨であるが、『間氣集』は詩人のランクづけに意を用いた書ではないにもかかわらず、錢起と郎士元を以て當代隨一の詩人とすることは紛れようがない。そして兩者への高い評價の陰に介在しているのは、一世代前の詩人王維である。『英靈集』序にも、「粵に王維・昌齡・儲光羲等二十四人は、皆な河嶽の英靈なり」とあるように、王維は當時にあって、とりわけ評判の高い「文宗」であった。王維亡きあと、錢起・郎士元の二人がその後を繼ぐ存在として抜きん出た位置にあることを、『間氣集』はとりわけ強く主張している。

錢・郎二人の詩評には、それぞれ次のような一節がある。

文宗の右丞（王維）、許すに高格を以てす。右丞の没後、員外（錢起）雄爲り。齊宋の浮游を交ぎ、梁陳の靡嫚を削り、迥然として獨立し、之と與に羣するもの莫し。（錢起評）

員外（錢起）は、河嶽の英奇、人倫の秀異なり。形「邪」國に家して自り、遂に大名を擁し、右丞より以往、錢と與に更ごも長ず。丞相自り已下、更ごも出でて牧と作るに、二公の詩もて祖餞する無くんば、時論之を鄙しむ。（郎士元評）

このように、高仲武によれば、錢起と郎士元はポスト王維の双璧だったのであり、この絶賛ともいべき評價に後世とはおのずと別種の同時代の眼を感じとることができ。さらにこの二人に關連して、李嘉祐についての次の批評にも十分注目する必要がある。

袁州（李嘉祐）は藻を天朝に振いて自り、大いに芳譽を收め、中興の高流たり。錢・郎と別に一體を爲し、往往にして齊梁の綺靡婉麗に涉る。蓋し吳均・何遜の

敵なり。

この詩評中の「與錢郎別爲一體」一句は、明らかに『詩品』の表現を模倣したものである。『詩品』上品の王粲評に、「曹・劉の間に在って、別に一體を構う」とあり、古今最高の詩人とされる曹植・劉楨の間で、王粲が二人に一步を譲りながらも、別種の詩風を構えていたことをいっている。王粲の詩について「文秀づるも質羸し」と評されるのは、劉楨評の「氣は其の文に過ぐ」と裏腹の關係にあり、表現力（文）よりも力強さ（氣）を重んずる鍾嶸は、自分の評價基準には合わないことを斷わりながら、別種の詩風の存することに配慮しているのである。

ひるがえって李嘉祐の場合、「錢・郎と別に一體を爲す」理由は何なのか。その鍵は、彼の詩が齊梁風の「綺靡婉麗」の趣を繼ぎ、吳均・何遜にも匹敵する存在と評されることにある。そうした六朝詩の遺風も、それはそれで一つの詩のありかたとして獨自の地位を主張しようというのである。いわば「風雅」と「清新」に對する「綺靡」という副次的なもう一つの批評基準が、そこに提示されていること

になる。そのような眼で見れば、李嘉祐の系列に連なる評價を受けた詩人はなお少なくないことに氣づくはずである。すでに見た李希仲評の「李詩輕靡、華勝於實」もそうだが、そのほかになお次のような例がある。

衆甫の詩は、婉媚綺錯にして、巧みに文字を用い、興喻に工みなり、（張衆甫評）

崔拾遺は、文彩炳然。（崔峒評）

常の詩は婉靡にして、未だ弘遠ならざるも、已に文流に入る。（鄭常評）

『詩品』の「氣」——「文」、『英靈集』の「風骨」——「聲律」に對して、『間氣集』が「風雅」——「清綺」という獨自の基準をもととして詩人の評價を貫こうとしているのは、その當否はともかく、詩評における批評基準の確立という點で十分注目されてよいのではないか。

『詩品』に特有の批評用語の踏襲という點では、『間氣集』は『英靈集』よりもさらに際だっている。以下その顯著な例を列舉してみることになしよう、まず『間氣集』の詩評を掲げ、「」内にそれが依據した『詩品』の本文を示す。

詩品から詩話へ（興膳）

1 此所謂才力不足、務爲清逸。（李希仲評）「才力苦弱、故務其清淺。」（中品謝瞻等評）

2 然「靡宇經山火、公田沒海潮」、亦指事造形。（戴叔倫評）「豈不以指事造形、窮情寫物、最爲詳切者邪。」

（序）

3 使前賢失步、後輩却立。（皇甫冉評）「足使叔源失步、明遠變色。」（中品謝朓評）

4 長轡未騁、芳蘭早凋。（同上）「恨其蘭玉夙凋、故長轡未騁。」（中品謝惠連評）

5 方之前載、芙蓉出水、未足多也。（韓翃評）「湯惠休曰、謝詩如芙蓉出水、顏如錯采鑲金。」（中品顏延之評）

6 古謂謝朓工於發端、比之於今、有慚沮矣。（郎士元評）「善自發詩端、而末篇多躓。」（中品謝朓評）

7 如「清磬渡山翠、閑雲來竹房」、又「流水聲中視公事、寒山影裏見人家」、斯亦披沙揀金、往往見寶。（崔峒評）「陸文如披沙簡金、往往見寶。」（上品潘岳評）

8 大抵十首已上、語意稍同、於落句尤甚、思銳才窄也。（劉長卿評）「此意銳而才弱也。」（謝朓評）

9 如「草色加湖綠、松聲小雪寒」……裁長補短、蓋絲之類歟。（同上）〔裁長補短、袁彥伯之亞乎。（下品戴逵評）〕

10 上傲班姬則不足、下比韓英則有餘。（李季蘭評）〔方陳思不足、比魏文有餘。（上品王粲評）〕

11 比於孟雲卿、尙在廊廡間。（竇參評）〔景陽潘陸、自可坐於廊廡之間矣。（上品曹植評）〕

12 姚子詩、雖未弘深、去凡已遠。（姚倫評）〔彥伯詠史、雖文體未遒、而鮮明緊健、去凡俗遠矣。（中品袁宏評）〕

13 屬辭比事、不失文流。（同上）〔屬辭比事、乃爲通談。（序）然託喻清遠、良有鑒裁、亦未失高流矣。（中

品嵇康評）徒自棄於高明、無涉於文流矣。（序）〕

因みに9の「裁長補短、袁彥伯之亞乎」二句を含む戴逵評三十字は通行本『詩品』になく、『吟窓雜錄』本『詩品』にのみ見られるものである。だからこの三十字を後世の補入として、本文から外す考えもあるが（たとえば、高木正一譯注『鍾嶸詩品』、一九七八年、東海大學出版會）、『間氣集』にその一部をもじった句が見出されることによって、高仲武

が依據した『詩品』にその詩評が確かに存在したことの傍證ともなうのではあるまいか。

このように、『英靈集』に次いで、『間氣集』もまた『詩品』の批評方法に深く學んだ書であることが知られる。『英靈集』の詩評中に引かれる秀句が必ずしも收載作品（その大半は五言古詩）に見られないのに對して、『間氣集』のそれはほとんど收載作品（その大半は五言律詩ないしは排律）から摘まれたものであり、その意味では、詩評と作品の相關性はより緊密になったと見なせよう。

八

『詩品』の最も直截な影響は、文學論ではなく、書論の領域において、具體的には梁の庾肩吾の『書品』においてまず現われた。いうまでもなく品等法という批評形式が、書の固有の藝術性と呼應しあつて、大きな共鳴を得たのである。次いで初唐の李嗣眞は、『書後品』によって『書品』の眞接の繼承者となるとともに、同じ品等法を用いた文學における『詩品』、繪畫における『書品』（『續書品錄』）を相

い前後して著わした。品等法がこうして流行したのは、それが時代の好尚に投じたからだ、長い時間的スケールを以て見た『詩品』の影響は、皮肉にもそれとは全く別のところに窺える。品等法そのものは、批評形式としては間もなく消滅する運命を免れなかった。

品等法を繼承する各種の評論よりもやや遅れて出現した殷璠の『河嶽英靈集』と『丹陽集』、そして高仲武の『中興間氣集』は、文學批評の基準の確立及び批評方法の體系化という本質的な面において、『詩品』の祖述者となった。ところで、形體面から見た場合、これら三種の書はいずれも主體は詩選にあって、その一部に詩論が附されるという共通性を備えている。その一面だけを取り上げれば、『詩品』との異質性が論議の對象とされるべきかも知れない。だが、さかのぼって『詩品』という書を、それが我々に提供されている現在のままの姿としてではなく、ありうべき原初の形體にまでふくらませて考えてみるならば、話はおのずから他の方向に向かわざるを得ない。すなわち『詩品』もまた本來、詩評と詩選の組み合わせから成っていたのではな

詩品から詩話へ（興膳）

いかということである。

『詩品』第二の序の末尾に、次のような一節がある。

嶸の今録する所は、五言に止まる。然りと雖も、今古を網羅し、詞文殆んど集まる。輕か清濁を辨彰し、利病を摘搯せんと欲し、凡そ百二十人なり。此の宗流に預る者は、便ち才子と稱す。

ことに「網羅今古、詞文殆集」といった句から想像すると、鍾嶸は詩評のみでなく、各詩人の主要な作品をも組み合わせて一書を編んでいた可能性が十分にありうる。この一節に先んずる個所で、鍾嶸は歷代の文學論に對する論評を行なっており、陸機「文賦」、李充「翰林論」、王微「鴻寶」、顏延之の文論、摯虞「文章流別志論」等が「皆な就きて文體を論じ、優劣を顯わさず」という缺點を持つ一方、謝靈運の『集詩』（『詩集』五十卷か）、張朮の『文士傳』といった詩文の總集は、それぞれ「詩に逢えば輒ち取る」、「文に逢えば即ち書す」といった、選擇眼において見識を缺く弱點を免れず、やはり品第評價の構想を持たなかったと批判している。かく文學論と總集を一體のものとする意識が

ここには見られる。中澤希男氏はかつて、『詩品中巻序及び沈約の條を案ずると、詩品は本來選集の附録として作られたもののやうに思はれる節がある』と指摘された（『河嶽英靈集攷』、『群馬大學紀要人文科學』一所收、一九五二年）。「沈約の條」とは、沈約評の「嶮謂えらく、約の著わす所既に多し、今淫雜を剔除して、其の精要を收むれば、允に中品の第と爲す」を指すのであろう。

理論と作品がペアーとして組み合わせられる總集の形式は、『詩品』のかなり以前から例がある。『隋書』經籍志で總集の元祖に位置づけられる西晉の摯虞の『文章流別集』の場合が、まさにそうである。『文章流別集』三十卷は、古今の文學の精華をジャンル別に編集したアンソロジーで、各ジャンルごとに論が附されており、それはのちに獨立して、『文章流別志論』二卷として世に行なわれるようになった。それよりややのちの李充『翰林論』三卷（隋志）も、梁の『七錄』では五十四卷の書として著録されており、やはり元來は各體を網羅した總集『翰林』に、論が附録されていたものと想像できる。こうしてみれば、『英靈集』『丹陽集』

そして『間氣集』が詩論と詩の組み合わせによって構成されるのは、古典的な總集の形式に則ったものだったということになる。『詩品』はその形式の仲介役を果していたわけである。

詩話の元祖として『詩品』が位置づけられるとき、それは後世に向かって一つの新しい文學批評のかたちを開示したという意味を持っている。詩作をめぐる瑣事を詩評の中にさしはさむこと、秀句を核としつつ詩評を展開すること、そして長くない文章によってある詩人の詩風を概括的に論評することなど、いずれも宋以後の數多くの詩話が多かれ少なかれ特色として備える性質であり、そのどれもがすでに『詩品』における特徴的な批評のありかたとして認められるところである。たとえば次のような宋人の評論に接するとき、これまで検討してきたような『詩品』の批評方法との距離が意外に近いことを印象づけられるにちがいない。

漢魏の古詩は、氣象混沌として、句を以て摘み難し。晉より以還方めて佳句有り。陶淵明の「菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る」、謝靈運の「池塘春

草を生ず」の句の如し。謝の陶に及ばざる所以の者は、康樂の詩は精工なるに、淵明の詩は、質にして自然なればのみ。（嚴羽『滄浪詩話』詩評）

しかし、その一方で見失われがちなのは、『詩品』はまた前代の古典的な批評方法の體現者でもあったという一面である。個別の詩評についての印象批評的な内容が、明確な批評基準のもとに體系性を具備しつつ整合されているのは、そうした古典的な方法と無縁ではないだろう。そして、それは『詩品』以後に尖鋭化した秀句の意識とも相俟って次代の文學論に影を投げかけ、『英靈集』『間氣集』等の特異な詞華集を生み出したのである。

『詩品』が併せ持ったこの二面性は、時間の推移とともにやがて乖離せざるをえない運命にあったようである。『詩品』の個別の詩評が、全書を有機的に構成する一要素という存在意義から解き放たれて一人歩きを始めるとき、それらは一つ一つが個別の存在として、無限に増殖する可能性を持つことになるだろう。「詩話出でて詩亡ぶ」といわれる詩話のおびただしい氾濫は、それを裏づけるものである。

詩品から詩話へ（興膳）

詩評の量的な集成としての詩話は、かくて形式の自由さという利便に乗じて、際限なく膨張しつづけていった。詩話が文學批評として質的な充實を獲得するためには、總集からの乖離を経てのち、詩話独自の立場からの創意が持續的に模索されなければならなかったはずである。

注

(1) 章學誠『文史通義』詩話の次の一條は、「詩話」の内容が多岐にわたる性質を早くから持っていたことを指摘する。「唐人詩話、初本論詩。自孟榮本事詩出、乃使人知國史敘詩之意、而好事者踵而廣之、則詩話而通於史部之傳記矣。間或詮釈名物、則詩話而通於經部之小學矣。或泛述聞見、則詩話而通於子部之雜家矣。雖書旨不一其端、而大略不出論辭論事、推作者之志、期於詩教有益而已矣」。

(2) 『詩品』のテキストは、原則として荒井健・興膳宏著『文學論集』（『中國文明選』13、一九七二年、朝日新聞社）所收のものに據った。

(3) 劉勰と鍾嶸の文學觀に對照的な見解が少なくないことにについては、拙稿『「文心雕龍」と『詩品』の文學觀の對立』（『中國の文學理論』所收、一九八八年、筑摩書房）。

(4) 『詩品』序には、また次のような例がある。

次有輕薄之徒、笑曹劉爲古拙、謂鮑照羲皇上人、謝朓古今

獨歩。而師鮑照、終不及「日中市朝滿」、學謝朓、劣得「黃鳥度青枝」。徒自棄於高明、無涉於文流矣。

「日中市朝滿」は、鮑照「代結客少年場行」の第十五句、

「黃鳥度青枝」は、虞炎「有所思」の第二句。鮑照への評價の是非はともかく、世人の間では評判になった句として例示されていることは疑いない。

(5) 『文心雕龍』明詩篇の「又古詩佳麗、或稱枚叔、其孤竹一篇、則傳穀之詞」は、「古詩十九首」其八の首句「冉冉孤生竹」を指す。句中の二字を摘んで篇名に用いた例となしうる。

(6) 「勅賜屏風書了即獻表」に、「奉宣聖旨、令空海書兩卷古今詩人秀句者」とある。また元兢及び『古今詩人秀句』については、興膳宏譯注『文鏡秘府論』〈弘法大師空海全集〉第五卷所收、一九八六年、筑摩書房）南卷の注を参照のこと。

(7) 晩代銓文者多矣。至如梁昭明太子蕭統與劉孝綽等、撰集文選、自謂畢乎天地、縣諸日月。然於取捨、非無舛謬。方因秀句、且以五言論之。至如王中書「霜氣下孟津」、及「遊禽暮知返」、前篇則使氣飛動、後篇則緣情宛密、可謂五言之警策、六義之眉首。棄而不紀、未見其得。

(8) 『古今詩人秀句』がわが國の秀句集に及ぼした影響については、拙稿「日中秀句考」(『文藝論叢』四〇、一九九三年三月、大谷大學文藝學會) 参照。

(9) 余嘉錫『四庫提要辨證』卷二十四に、「案璠自序云、『詩二百三十四首、分爲上下卷』。故唐書藝文志、直齋書錄解題、

讀書附志、宋史藝文志、皆作二卷、無作三卷者。……試問以二卷之書、何從隱寓三品乎」。

(10) 『河嶽英靈集』は、四部叢刊本に據り、併せて李珍華・傅璇琮『河嶽英靈集研究』(一九九二年、中華書局) 所收の校點本を参照した。但し、序に關しては、『文鏡秘府論』南卷を底本とした。

(11) この句を含む序冒頭の百二字を、四部叢刊本等の諸本は缺く。いま『文鏡秘府論』南卷所收の序により補う。『文苑英華』卷七百十二にもこの一段を收める。

(12) 『詩品』の序は、諸本により、上中下各卷の卷頭に配するものと、三篇をまとめて卷首に置くものがある。高木正一譯注『鍾嶸詩品』(一九七八年、東海大學出版會) 二九ページ参照。

(13) 「元嘉」二字を底本は「昌齡」に作るが、毛斧季・何義門兩校本に依る校勘記にもとづいて改める。

(14) 「集論」に、「自漢魏至於晉宋、高唱者十有餘人、然觀其樂府、猶時有小失。齊梁陳隋、下品寔繁、專爭拘忌、彌損厥道。夫能文者、匪謂四聲盡要流美、八病咸須避之。縱不拈二、未爲深缺。即『羅衣何飄颻、長裾隨風還』雅調仍在、況其他句乎」。

(15) 注(3)の拙論参照。

(16) 潤州延陵有包融・儲光羲。曲阿有丁仙芝、監察御史蔡希周、渭南尉蔡希寂、處士張彥雄・張朝、校書郎張暈、吏部常選周

瑀、長洲尉談戴。句容有殷遙、硤石主簿樊光、橫陽主簿沈如筠。江寧有右拾遺孫處立・徐延壽、丹徒有江都主簿馬挺、武進尉申堂構。十八人皆有詩名、殷璠次爲丹陽集。(中華書局校點本による)。

- (17) 『丹陽集』に關する考證には、近年相い次いで二點の論考が著わされた。卞孝萱「殷璠《丹陽集》輯校」(卞孝萱『唐代文史論叢』所收、一九八六年、山西人民出版社)。陳尚君「殷璠《丹陽集》輯考」(『唐代文學論叢』總第八輯所收、一九八六年、陝西人民出版社)所收。

- (18) 『吟窓雜錄』卷四十一所收の「殷璠河岳英靈集序」は次の通り。「天〔夫〕文有神來、氣來、情來、有雅體、鄙體、俗體。編記者能審鑒諸體、委詳所來、方可定其優劣、論其取舍。これは明刊本序の冒頭部に相當する。

- (19) 「孤山日暮青」は五律「送潘三入京」(『全唐詩』卷百十四)の結句で、それに對應する第七句は、「把手河橋上」。この最後の引用のみが單句で、體例に合わない。

- (20) 『吟窓雜錄』卷二十七の常建の項は次の通り。「殷璠曰、『高才而無貴仕』。建詩曰、『松際露微月、清光猶爲君』。又詩、『山光悅鳥性、潭影空人心』。又詩、『戰餘落日黃、軍敗鼓聲死』。同樣に、劉昫の項を引く。「殷璠曰、『春虛詩、情幽興遠』。春虛詩、『松色空照水、經聲時有人』。又詩、『滄溟千萬里、日夜一孤舟』。又詩、『歸夢如春草、悠悠繞故鄉』。又詩、『駐馬渡江處、望鄉待歸舟』。又詩、『道由白雲靜、春與

詩品から詩話へ(興膳)

青溪長」。又詩、『時有落花至、遠隨流水香』。又詩、『閑門向山路、深柳讀書堂』。

- (21) 『中興間氣集』は、四部叢刊本(明刊本)を底本とし、卷末に附す孫統修の校記、及び四庫全書本等を参照した。

- (22) 中澤希男「中興間氣集考」(『群馬大學教育學部紀要』人文科學篇一一、一九六二年七月)、同「唐人選唐詩考」(同上二二、一九七三年三月)参照。

- (23) 『詩品』の「別構一體」を模した表現としては、より早く梁・庾肩吾『書品』の阮研評、「阮研居今觀古、盡窺衆妙之門。雖復師王祖鍾、終成別構一體」がある。

- (24) 拙稿「『詩品』と書畫論」(『中國の文學理論』所收)参照。
(25) 拙稿「摯虞『文章流別志論』攷」(『中國の文學理論』所收)参照。

この小論は、一九九二年・一九九三年の二年間にわたって交付を受けた、文部省科學研究費補助金による、「詩話の總合的研究」の研究成果の一部である。